

空



2009年

SORA 28号

吾亦紅 (28) | 3

柴田 佐知子

菊の前死者は見らるるばかりなり

湯に浮きし赤子が眠る望の夜

どの皿も秋刀魚の身幅には余る

墓ひとつひとつ見てゆく秋の昼

人間を見尽して蛇穴に入る

稲妻や恋はねば日記白きまま

奥の間といふ底冷でありにけり

月夜

樋口みのぶ

水底を流るる影や秋立てり

羽音のみ移りて朝の林檎園

渋柿を剥き終へし手のごはごはす

茱萸の木のむかうに牛の飼はれをり

夕風に獣の匂ふ秋薊

七曲り十三曲り曼珠沙華

踊り場に出て話しゐる月夜かな

飴玉のざらめこぼるるちちろ虫

天窓に月ののぞける暖炉かな

風下の鬼の隠るる浜焚火



「蜘蛛の糸」のお釈迦様ではないが、
気持の良い朝の冷気の中をゆつくりと庭
を歩いていたら、蜘蛛の巣があちこちに
増えていた。払おうかとも思ったが生活
圏を脅かすようであるままにする。

坪庭の隅には水引草が畳半分程に固
まって咲いている。一本だと寂しい花だ
が群れ咲くと実に美しい。つくばいに目
を移すと木の葉がふつと動いた。葉を除
く蟹がいた。こんな町中にいつどこから
来たのだろうか。楽しみが増えた。俳句
の材料は庭のあちこちにあるのだが、何
とも句が浮かんでこないのが情けない。

五感

柴田志津子

秋澄むや河童が統べし筑後川
高札の河童奉行や荻の声
無頼派の終の栖やきりぎりす
記紀の島翼下にをさめ秋の鳶
動くとも見えず秋日の漁舟
潮鳴りや葛うらがへる火焰塚
島の子の課外授業に木の実降る
ふるさとや冬菜に塩をふる音も
瓢の実や島の高みに蒙古塚
五感とうに滅びへ向かひ日向ぼこ



「できない。もう俳句はやめようかしら」私の日々の口癖である。その都度、娘が「どうぞ御遠慮なさらず、おやめになったら。そのかわり、明日は健忘症になられることでしょう」と返してくる。母子の毎日のやりとりである。

義弟が庭に咲かせた見事な薔薇を抱えて来てくれたことがあった。丁度、遠くに住む息子から初孫が誕生したとの知らせが入ったときであった。

薔薇届き生れし子彩あやと命名す 悠
私が初めて作った俳句である。

その女の子も、今年三十二才になったと言う。私の俳句は成長しないまま、今も幼稚なものを作りつづけている。

秋 千 晴

乳牛の乳房がとどく大花野

秋の夜やヨーガの手足からみたる

唐辛子とりあへず吊る軒のあり

台風の小屋ごと鶏をさらひたり

ふんばりて組体操の秋高し

水澄むや円周率の数へ歌

こほろぎの庭箒より飛び出せり

秋澄むや餓鬼大将は屋根の上

日没の前に満月昇りゐる

高層のカクテルグラス冬銀河

ベランダから大きな楠が見えます。鳥たちの住処になつていたので鳴き声もよく聞こえてきます。台風風の強さもその木の揺れ具合が目安でした。ところが先日のこと、大きなトラックやクレーンで大楠は伐採されてしまいました。

「ギギードドン」とまるで大楠が泣いているように聞こえました。鳥たちが、倒された大楠の上を泣きながら旋回しているのを余所目に何事もなかつたように片づけられていくのがとても速く感じられました。

住処を失つた鳥たちは他の木に入つては追い出されてきているようです。縄張りがあるのでしょうか。

以前はミニトマトや金柑を採つたり突いて落としたりするので困っていました。が今は目に付きやすい様にしてあげているのにパツタリと来なくなりました。

跡地にはやがてマンションでも建つでしょう。人間の都合で動物や鳥たちもホームレスになつていくのを間近に見て環境保護の大切さをあらためて感じました。

空 作 品 抄

柴田佐知子抽出

戸口まで煙流るる秋収め

福岡 高倉 和子

朱に染めて愛のいろとす赤い羽根

東京 中田みなみ

金魚買ふ仰向きの死を想ひつつ

長崎 荒井千佐代

柿紅葉無傷といふは気のひける

埼玉 服部 早苗

みのこづち付けて疲れて戻りけり

福岡 あさなが捷

翔つ鳥の忙しき音や寒の入り

糸島 小林 朱夏

匂に生を遺して裂けし山椒の実

須恵 苑 実耶

部屋の窓叩き友来る敬老日

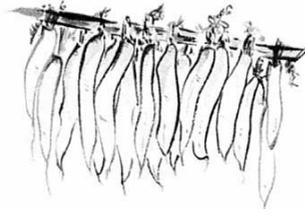
うきは 高倉恵美子

渋柿を剥き終へし手のごはごはす

福岡 樋口みのぶ

五感とうに滅びへ向かひ日向ぼこ

福岡 柴田志津子



高層のカクテルグラス冬銀河

粕屋 秋 千 晴

曼珠沙華一世をかけし仇討も

福岡 中条 さゆり

踊子の息をはづませ戻りけり

福岡 大地 真理

遊びたき子が子を誘ふ蛸草

長崎 鳳 蛮 華

頷いてこと足るよはひ菊贈

行橋 安武 農子

山鹿灯籠祭

いつせいに灯の海となる踊かな

熊本 田島 洋子

いつ迄も立掛けしまま竹婦人

福岡 白水 良子

早暁のかみなり一つ鬼瓦

福岡 吉村 摂護

くろがねの秋に親しむ甲斐路かな

山梨 野畑 小百合

山河みな神に捧れる野分かな

宇治 池田 華甲

日は西に男の懺悔は稲穂の前

粕屋 長 憲 一

一人旅終へし我家の夜長かな

福岡 山内 碧

生まれては蝶と呼ばれて低く飛ぶ

福岡 星原 悦子

曼珠沙華烈士といふは自害して

八尾 田岡千章

新涼や文机の向き少し変へ

福岡 矢野百合子

追伸に良夜とありし見舞状

福岡 田代貞枝

水だけを見て金魚玉運びたる

羽曳野 織田高暢

ガスの火に秋刀魚一尾を斜めに置く

大阪 青木朋子

荒魂あらみたまよりたまはりし秋の蛇

大阪 堀江恵子

新豆腐一匙一匙の齢かな

福岡 亀井紀子

秋刀魚干す空が茜に染まるまで

東京 今井春生

百日紅家並に人も風もなし

横浜 小川涼

収穫祭野菜に顔が描いてあり

鎌倉 永原朱

笛なつて花野の子等の集合す

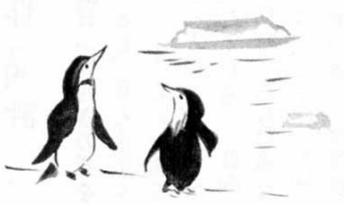
北九州 毎熊美智子

整列のかけ声揃ふ炎天下

神戸 石川叔子

独り居に電話のひびく良夜かな

福岡 ふじの茜



新涼や氣球は海へ出でゆけり

東京 古川 夏子

注文の本の届きし良夜かな

東京 遠山のり子

廢業の小鳥屋の籠西日さす

東京 山田 正子

秋の蜂桃の切り株甘さうな

山梨 中原 俊之

啄木鳥に小屋たゝかれて夜明けたり

東京 清水 量子

鬼灯を揉むたび母へ近づけり

北九州 片田 きく

かまきりの翹ひろげたる夕日かな

萩 岸 千手

柏餅母は教へぬ葉のありか

福岡 川鍋 明子

落し水笹舟一つほどけたり

佐賀 堤 堅策

仏間まで秋刀魚の煙流れけり

福岡 川崎 よしみ

冬菜畠手入れせし夜の指熱し

粕屋 長 芳子

若者に手を貸され見る秋の虹

福岡 神谷 耕輔

職ひきて故山の月を祭りけり

宇美 内藤 玲二